戦後初期のロシア正教会における「戦争と平和」像 ——『モスクワ総主教庁ジャーナル』の内容分析——

宮 川 真 一

(創価大学・八洲学園大学非常勤講師)

“War and Peace” Image in the Russian Orthodox Church in the Early Postwar Period: Content Analysis of the “Journal of the Moscow Patriarchate”

MIYAKAWA, Shinichi

Part-time Lecturer, Soka University / Yashima Gakuen University

Abstract

In 1949, international peace campaign was formed systematically. The Russian Orthodox Church participated in the international peace movement and played a leading role. In the same year, a column “In Defense of Peace” was newly established in the “Journal of the Moscow Patriarchate”. In the “Peace” column, information on the peace campaign and the Russian Orthodox Church's participation in that movement and the most important documents of the World Peace Council began to be published. However, no specialized research on the peace activities of the Russian Orthodox Church in the 20th century exists in Russia, and this theme has not been reviewed and evaluated academically.

In this paper “war and peace” image presented by the Russian Orthodox Church in early postwar years is considered, analyzing the articles published in the “Peace” column in the “Journal”. The followings are observed as features of the “Peace” column. It closely reflects the trend of the peace organizations both inside and outside the Soviet Union, a wide variety of articles are published primarily as editorials, and authors consist mainly of the Orthodox high priests, such as Metropolitan Nikolai. In addition, as character of the “Peace” column, the most articles relate on the Christian Church and the world peace organizations, about half of the articles include direct criticisms directed toward the Western countries and direct praises to Stalin and the Soviet Union.

Nikolai was a leader of peace activities in the Russian Orthodox Church. He talked about Christian church. He insisted that the Russian Orthodox Church contributed to peace, and that the Christian world had to cooperate each other. In addition, Nicolai wrote about world peace organizations. He reported favorably the

Keywords: Russian Orthodox Church, Journal of the Moscow Patriarchate, Metropolitan Nikolai

condition of the various peace movements including the World Peace Council and praised Stalin and the Soviet Union. Furthermore, Nikolai preached about international relations. While striving for peace activities such as the award of the International Stalin Peace Prize, he condemned fighting acts of the Western countries including the United States of America in the Korean war.

In this way, the "Peace" column is filled with the voice of peace as a Christian. However, the Orthodox Churches are praised in the field of Christian church, the Eastern countries are praised in the field of world peace organizations, and the Western countries are criticized in the field of international relations. The "war and peace" image presented by the Russian Orthodox Church in the early postwar period consists of an image of the Orthodox Church which serves peace, an image of the peace-loving Eastern countries, and a militant image of the Western countries. "Journal" actively discussed peace, but it reflected the intention of the Soviet state under the Cold War of those days.

は じ め に

1943 年にスターリンが宗教政策を転換したことにより、ソビエト国家とロシア正教会との関係は改善される。しかしながら、スターリンは「ロシア正教問題評議会（Совет по делу Русской Православной Церкви）⁽¹⁾」の監督下に置くことによって、教会を国家に奉仕する社会組織に造り変えた。組織的な抵抗力を失っていた教会は無神論を標榜する国家に仕え、世俗的問題への不介入の原則を遵守することによってその存続と活動を許されることになった。国家と教会との間でもっとも緊密な相互協力が行なわれているのは、対外関係の分野である。両者はそれぞれの利益のために協力し、利用し合う関係にある。教会はその国際的影響力を行使して国家の対外政策を支援し、こうした政治的奉仕の見返りとして自己に有利な諸条件を獲得しようとする。49 年、世界的な平和擁護の運動が組織的に形成される。教会は世界的な平和運動に参加し、指導的な役割を演じた。教会機関誌『モスクワ総主教庁ジャーナル（Журнал Московской Патриархии）』（以下、『ジャーナル』）は同年、「平和擁護のために（В защиту мира）」欄（以下、「平和」欄）を新設した。国家の平和戦略は、平和愛好的なソ連と戦争屋の西側諸国というイメージを固定しようとするものであった。教会の平和活動における基本的なテーマも、ソ連イメージの改善と反西側宣伝であったとされている⁽²⁾。

⁽¹⁾ 1943 年、ソ連人民委員会議の決定により創設された政府の特別機関である。議長には 41 年以来内務人民委員部で宗教問題を担当するゲオルギー・カルポフ（Георгий Карпов, 1898–1967）が就いた。評議会は創設の時点から教会の活動に積極的に参加し、時おり教義や宗規の問題に干渉しつつ教会を監督した。46 年にニコライ府主教を長として設立されたロシア正教会渉外局とも積極的に協力した。43 年から 50 年までの時期には以下の基本的な課題があった。1, ソ連における信教の自由に関して西側社会を迷わすために教会の対外関係を利用する。国家が聖堂、修道院の開設、教会出版部の発展を許可したことは前代未聞であった。2, 政権に対する寛容、ソ連諸民族間の友愛と団結という原則を強固なものとするために、教会を社会的な接着剤として利用する。3, 公式の共産主義プロパガンダでは教会は主要な敵、共産主義建設のブレーキ、世界の発展に対する古びた考えの配達人、反啓蒙主義として登場していた。廣岡 2007, 434–41; Онищенко 2011, 133–56; Одинцов 2014, 304–15, 366–9.

⁽²⁾ Fletcher 1973, 1–38; 廣岡 1987, 74–96; 廣岡 1988, 104–24; Зельноф 1991, 201–6; 廣岡 1993, 159–85; Шкаровский 1999, 284–393; Chumachenko 2002, 87–141; Шкаровский 2009, 1–27.

コロリ（2015）は各種文献と『ジャーナル』掲載記事を基に、1945年から49年にかけてロシア正教会の積極的な平和活動の前提条件が形成されたと論じる。教会の愛国的で反戦的な立場とその積極的な国際活動は、教会の平和活動が発展していく基盤であったという⁽³⁾。ザバブニコワ（2014）はルカ大主教が48年から51年にかけて『ジャーナル』に執筆した「平和擁護のため」の記事4点を取り上げ、彼の記事が政治的に日和見主義であるとともに、国家体制に対する見解が正教のプリズムを通して屈折していたことを指摘する⁽⁴⁾。チュマチェンコ（2007）はロシア公文書館資料を基に49年から53年における教会の平和活動を考察し、「教会の高位聖職者は政権に許された範囲内で平和創出活動の機会を最大限——自身の利益という観点で——利用するためにすべてのことを行なった」と論じる⁽⁵⁾。しかしながら、ロシア正教会の平和活動に関する研究史を検討したコロリ（2013）によれば、20世紀における教会の平和活動を取り上げた専門的な研究はロシアにも存在せず、このテーマは学術的にしかるべき検討と評価を受けていない⁽⁶⁾。本稿はいずれの先行研究にも見られない『ジャーナル』「平和」欄の内容分析を行なうことにより、戦後初期に教会が提示した公式の「戦争と平和」像を明らかにしようとするものである。

1. 『モスクワ総主教庁ジャーナル』と分析方法

1931年に創刊された『ジャーナル』は、教会の聖職者階級や教会活動家向けの公式機関誌である。当時は毎号10ページ程度で3000部が不定期に発行され、35年には廃刊となった。その後、43年に月刊『ジャーナル』が復刊され、今日まで刊行され続けている。これによりモスクワ総主教庁の出版活動は定期的な性格をもつようになった。40年代には毎号15000部が発行されるようになり、徐々に部数は増大していく。40年代は毎号平均60ページであり、50年代には平均72ページに達している。『ジャーナル』の最初のページを占めるのは公式資料、たとえば、総主教のメッセージ、挨拶電報、教会褒章についての報告などである。それらに続き、「教会生活」「説教」「正教生活より」「世界教会活動」「論文」「礼拝実務から」といった常設欄がある。49年には「平和」欄が追加される。同欄は平和擁護運動およびロシア正教会のその運動への参加についての情報や、世界平和評議会の最も重要な文書を掲載し、平和創出の理念を普及する上で重要な役割を担った。同欄は89年から「平和と人類生存のために」と改名し、91年まで続いている⁽⁷⁾。

シカロフスキー（1999）は、戦後20年間におけるソ連の国家・教会関係を以下のように区分している。第1期は、ドイツのソ連侵攻を機に国家と教会が「一時的な“休戦”」をした1945～53年。第2期は、スターリンが死去し「総主教管区の立場の強化」がなされた53～57年。第3期は、フルシチョフによる宗教弾圧が始まり国家と教会が「再び“戦争”」状態に入る58～64年である⁽⁸⁾。本稿ではロシア正教会の平和活動が開始された第1期に

⁽³⁾ Король 2015, 121–6.

⁽⁴⁾ Забавникова 2014, 137–9.

⁽⁵⁾ Чумаченко 2007, 152–6.

⁽⁶⁾ Король 2013, 144–52.

⁽⁷⁾ Голженко 1990, 201–14; Шкаровский 1995, 48; Король 2015, 125; Официальный сайт Русской Православной Церкви(б).

⁽⁸⁾ Шкаровский 1999, 332–93.

焦点を当て、『ジャーナル』49年1月号から53年12月号までの5年間60冊における「平和」欄の掲載記事214点を分析対象とする⁽⁹⁾。分析方法として同欄掲載記事を標本とし、その特徴を記事の数量・種類・執筆者の面から量的に考察する。また、同欄の性格を記事のテーマ・方向の面から量的に考察する。次いで、『ジャーナル』を代表するニコライ府主教による記事を、キリスト教会・世界平和組織・国際関係の各分野に区分し、質的に考察していく⁽¹⁰⁾。

2. 「平和擁護のために」欄の特徴

図1 「平和擁護のために」欄記事・ページ数

本節では「平和」欄に掲載された各種の記事を形式面から分析し、この欄の特徴について検討する。図1は、掲載された記事数とページ数を月ごとにグラフ化したものである。これによれば月ごとの記事量は一定しておらず、いくつかのピークが観察される。1949年5月・6月は同欄が創設された直後である。また、同年4月の第一回世界平和擁護者大会を初め、組織的な平和運動が世界およびソ連で発足した時期にあたる。50年11月・12月は、同年6月の朝鮮戦争開始を受け、同年11月の第二回世界平和擁護者大会と、そこで決定された世界平和評議会の設置が『ジャーナル』でも大いに話題となった。52年5月～8月は、同年4月のサンフランシスコ平和条約と日米安全保障条約の発効を受け、東側諸国の危機感がある程度反映しているものとみられる。この期間中、同年5月に開催さ

⁽⁹⁾ 本稿で利用した『モスクワ総主教庁ジャーナル』の記事は次のサイトを参照した。Архив Журнала Московской Патриархии с 1943 по 1954 год; Журнала Московской Патриархии. なお、これらサイト内の1951年6月号のファイルに同年7月号の誌面が掲載されているため、同年6月号の記事は別に取り寄せた。

⁽¹⁰⁾ 内容分析の方法については次を参照した。鈴木・島崎 2006; 有馬 2007; 北澤・古賀編 2008; 大谷・木下・小松ほか編 2013。

れた平和擁護のためのソ連全教会と宗教団体会議をテーマとする記事がおよそ半数を占めている。ここではソ連宗教界も一丸となって平和運動に立ち上がったことが報じられている⁽¹¹⁾。

図2 「平和擁護のために」欄種類別記事数

図3 「平和擁護のために」欄著者別記事数

図2は、「平和」欄に掲載された記事を種類別にグラフ化したものである。同欄には論説を中心に多種多様な記事が掲載されている。同欄に掲載された記事214点のうち、151点には著者名が記載されている。その著者は63名を数える。その中で個人名（イニシャルを含む）は53、組織名は9、個人名と組織名の連名が1となっている。図3に示されるように、ニコライ府主教を筆頭に、2回以上登場する17名中11名が正教会の高位聖職者となっている。

⁽¹¹⁾ 日本平和委員会1969。

3. 「平和擁護のために」欄の性格

表1 「平和擁護のために」欄テーマ別記事数

記事数	テーマ	記事数	テーマ
32	キリスト教会	2	ソビエト平和擁護委員会
28	ロシア正教会	2	ドイツ
18	正教会	2	日本
17	世界平和擁護者大会	2	平和擁護—キリスト教グループ
17	平和擁護のためのソ連全教会と宗教団体会議	1	アジア太平洋諸国平和擁護者大会
16	世界平和評議会	1	アメリカ合衆国
12	朝鮮戦争	1	アメリカ大陸大会
9	全ソ平和擁護者会議	1	核兵器禁止
8	ストックホルム・アピール	1	カチンの森事件
6	五大国間平和条約	1	カトリック教会
6	平和問題全般	1	キリスト教友好協会
5	国際スターリン平和賞	1	国際女性民主連盟
5	諸国民平和擁護大会	1	国際連合
5	文化交流	1	大祖国戦争
4	ソ連	1	大量破壊兵器禁止
2	イギリス国教会	1	ドイツキリスト教民主同盟
2	国際平和闘争デー	1	フランス平和国民評議会

本節では「平和」欄に掲載された記事の内容面から分析し、同欄の性格について検討する。まず、表1は同欄で取り上げられた34のテーマ一覧である。これらのテーマを6つのカテゴリーに分類すると「キリスト教会」が40%と最も多く、次いで「世界平和組織」20%、「東側諸国」18%、「平和問題」12%、「戦争問題」7%、「西側諸国」3%となっている。また、同欄で西側批判とソ連賛美に関する明示的な文章を含む記事は、「西側批判・ソ連賛美両方」18%、「西側批判のみ」20%、「ソ連賛美のみ」11%であり、これらの文章を含まない「中立」的な記事は51%であった。

前節で見たように、「平和」欄の署名入り記事を最も多く執筆しているのがニコライ府主教（митрополит Крутицкий и Коломенский Николай, Ярушевич Борис Дорофеевич, 1892–1961）である。彼は1943年に『ジャーナル』編集委員に就任し、46年から60年にかけて『ジャーナル』編集長とロシア正教会の初代渉外局長を務めた。49年には神学博士の学位が授与され、教会の平和活動における中心的な存在となっていく⁽¹²⁾。彼の署名が入った記事は、連名記事1点を含め40点を数える。それらの記事を6つのカテゴリーに分類すると、「キリスト教会」に関する記事が40%と最も多く、以下「国際平和組織」30%、「西側諸国」10%、「平和問題」7%、「戦争問題」7%、「東側諸国」5%と続いている。この割合は「平和」欄全体のテーマ別記事割合と大差がない。また、彼が西側批判とソ連賛美を明示的に書き記した記事の割合は、「西側批判・ソ連賛美両方」18%、「西側批判のみ」19%、「ソ連賛美のみ」11%、「中立」的な記事が52%となっている。この割合も、「平和」欄全体の方向別記事割合と同様の傾向を示している。従って、彼の記事全体は同欄に掲載

⁽¹²⁾ Официальный сайт Русской Православной Церкви(a). ニコライ府主教は『ジャーナル』の「説教」欄を担当し、そこで愛と母国のための労働を説いてきた。1952年8月、カルボフ議長はニコライの説教に苦情が寄せられているとの情報を本人に伝えた。これに反発したニコライはモスクワの聖堂における毎日の説教を続けながらも、『ジャーナル』の「説教」欄を廃止するに至った。この事実はニコライの活動と『ジャーナル』もロシア正教問題評議会に統制されていたことを示唆している。Шкаровский 1995, 49–50; Chumachenko 2002, 119–20.

された記事全体の論調を代表していると考えられる。そこで、次節では彼の署名入り記事を取り上げ、質的な考察を試みたい。

4. ニコライ府主教とキリスト教会

表2 ニコライ府主教とキリスト教会

年	月	タイトル	テーマ	組織	種類
1949	5	ニコライ府主教。世界平和擁護者大会でのスピーチ	ロシア正教会	世界平和擁護者大会	スピーチ
1949	9	ニコライ府主教。全ソ平和擁護者会議でのスピーチ	ロシア正教会	全ソ平和擁護者会議	スピーチ
1950	4	ニコライ府主教。世界平和擁護者大会常任委員会代表との会見におけるソビエト平和擁護委員会会議でのスピーチ	ロシア正教会	ソビエト平和擁護委員会	スピーチ
1950	7	ニコライ府主教。平和擁護のために。平和擁護問題に関するチェコスロバキア全キリスト教信仰聖職者階級会議におけるスピーチ	正教会	チェコスロバキア全キリスト教信仰聖職者階級会議	スピーチ
1950	7	ニコライ府主教。平和のために！	ロシア正教会	チェコスロバキア大衆集会	スピーチ
1950	8	ニコライ府主教。平和擁護問題に関するチェコスロバキア全キリスト教信仰聖職者階級会議にて	キリスト教会	チェコスロバキア全キリスト教信仰聖職者階級会議	報告
1950	11	ニコライ府主教。第二回全ソ平和擁護者会議におけるスピーチ	ロシア正教会	全ソ平和擁護者会議	スピーチ
1951	10	ニコライ府主教。キリスト教平和国民会議の祝辞(ロンドン市)	キリスト教会	キリスト教平和国民会議	電報
1951	10	ニコライ府主教。平和活動教会間委員会の祝辞(ニューヨーク市)	キリスト教会	平和活動教会間委員会	電報
1951	11	ニコライ府主教。闘争を強化しよう！ウィーンにおける世界平和評議会第二回定例会議におけるスピーチ	ロシア正教会	世界平和評議会	スピーチ
1952	8	ニコライ府主教。黙ってはいけい。世界平和評議会臨時定例会議におけるスピーチ	キリスト教会	世界平和評議会	スピーチ
1953	1	ニコライ府主教。諸国民平和擁護大会でのスピーチ	キリスト教会	諸国民平和擁護大会	スピーチ
1953	6	ニコライ府主教。「平和擁護—キリスト教グループ」書記カテリーナ・ウィリアムソン女史への電報。ロンドン	平和擁護—キリスト教グループ	ロシア正教会	電報
1953	9	ニコライ府主教。ソビエト平和擁護委員会拡大総会会議におけるスピーチ	ロシア正教会	ソビエト平和擁護委員会	スピーチ
1953	10	ニコライ府主教。ヨーク大主教発言の反響	イギリス国教会	ロシア正教会	論説
1953	12	ニコライ府主教。ウィーンにおける世界平和評議会定例会議でのスピーチ	キリスト教会	世界平和評議会	スピーチ

ニコライ府主教によるキリスト教会に関する記事は16点を数える。表2は各記事の『ジャーナル』掲載年月、記事のタイトル、記事全体のテーマ、記事に最も関連する組織、記事の種類についての一覧である。この中で7点はロシア正教会をテーマとしている。1950年7月、チェコスロバキア⁽¹³⁾で開催された平和擁護のための大衆集会において14万人の聴衆を前にスピーチを行い、次のように語る。

「ロシア正教会は先の戦時中、全身全霊で我々が国民の闘争に勝利するために参加しました。そして今、諸国民による平和のための闘いが行われているとき、ロシア正教会は先の戦争が終わるやいなや立ち上がり、全世界における平和の防衛というこの神聖で高潔な任務に我が国民および全ての進歩的な人類と肩を並べて取り組んでいます。毎日の平和への祈り、信徒への総主教のアピール、聖堂での説教、印刷された言葉、平和擁護のための大会や会議への参加、すべてのキリスト教徒および全人類への訴えにより、教

(13) 1945年から「チェコスロバキア共和国」を正式国名とし、48年以降は社会主義体制を採った。チェコスロバキア正教会は51年にモスクワ総主教庁から独立教会としての承認を受けている。World Council of Churches. 正教会はカトリックのような統一的組織をもたず、民族・国家ごとに独立した教会組織を形成している。組織は完全な自治を有する独立教会と、ある程度の自治を有する自治教会に分けられる。東方正教会における当時の総主教庁はコンスタンティノープル(トルコ)、アレクサンドリア(エジプト)、アンティオキア(シリア)、エルサレム(イスラエル)、モスクワ(ロシア)、グルジア、セルビア、ルーマニア、ブルガリアの9つである。これらに加えキプロス、ギリシャ、アルバニア、ポーランド、チェコスロバキアの正教会が独立教会であった。井上編 2005, 67-9; 世界宗教百科事典編集委員会編 2012, 126-7.

会はたゆまず平和のために闘い、このことを教会の声が届くであろうすべての人に呼び掛けます。教会はこうして自身の神聖な義務、平和と愛という宗教の義務を果たしているのです⁽¹⁴⁾。」

ニコライはロシア正教会がさまざまな手段で平和のために尽力していることを訴えている。また、キリスト教会をテーマとする記事は6点を数える。53年8月、ソビエト平和擁護委員会⁽¹⁵⁾拡大総会会議でのスピーチにおいて次のように語る。

「諸大国首脳の会見と国際的なあつれきの平和的な解決についての、全ての民族と宗教の何億という人々の要請に応えるため、我らが教会は全てのキリスト教会が交渉の勝利、諸国民間の善意による平和に声をそろえて賛成するよう全力を尽くしています。／この土壌の上に、全宗派のキリスト教徒が一つにならなければなりません。私たちはこのことを西欧のキリスト教界に呼び掛けます。彼らはこれまで平和の諸問題、この人類の基本的な問題について自らの態度を明らかにしていません。大切なことは何らかの生活様式または社会体制の優越性についてではなく、諸国民の平和的共存の基盤としての諸国民の利益と自由の相互尊重についてであることを理解すべきときなのです⁽¹⁶⁾。」

ニコライは平和のためにキリスト教世界が協調すべきことを提唱するのである。

5. ニコライ府主教と世界平和組織

表3 ニコライ府主教と世界平和組織

年	月	タイトル	テーマ	組織	種類
1949	5	ニコライ府主教。世界平和擁護者大会にて	世界平和擁護者大会	世界平和擁護者大会	報告
1949	6	報告	世界平和擁護者大会	世界平和擁護者大会	報告
1950	12	ニコライ府主教。ソビエト平和擁護委員会の記者会見における声明	世界平和擁護者大会	全ソ平和擁護者会議	声明
1950	12	ニコライ府主教。第二回世界平和擁護者大会におけるスピーチ	世界平和擁護者大会	世界平和擁護者大会	スピーチ
1950	12	ニコライ府主教。第二回世界平和擁護者大会について	世界平和擁護者大会	ロシア正教会	報告
1951	3	ニコライ府主教。世界平和評議会第一回定例会議にて	世界平和評議会	ロシア正教会	報告
1951	12	ニコライ府主教。世界平和評議会第二回定例会議	世界平和評議会	世界平和評議会	報告
1952	3	ニコライ府主教。アメリカ大陸大会幹部会への電報	アメリカ大陸大会	アメリカ大陸大会	電報
1952	8	ニコライ府主教。世界平和評議会臨時定例会議にて	世界平和評議会	世界平和評議会	報告
1952	12	ニコライ府主教。偉大な諸国民平和擁護大会前日に	諸国民平和擁護大会	ソビエト平和擁護委員会	スピーチ
1953	2	ウィーン諸国民平和擁護大会にて	諸国民平和擁護大会	諸国民平和擁護大会	報告
1953	7	ニコライ府主教。世界平和評議会ブダペスト定例会議	世界平和評議会	世界平和評議会	報告

⁽¹⁴⁾ Митрополит Николай 1950, 16–7.

⁽¹⁵⁾ これはソ連で最大の平和組織である(1949–91)。1949年8月、モスクワで全ソ平和擁護者会議が開催され、1200名の代表者と外国からのゲストが参加した。この会議でソ連の著名な学者、作家、俳優、社会活動家、大祖国戦争の古強者、労働集団の代表ら79人がソビエト平和擁護委員会に選出されている。同委員会はソ連対外政策プロパガンダの一部であったが、平和の理念を発展させる上で重要な役割を演じた。50年に設立された世界平和評議会に加入し、51年からジャーナル『平和擁護のために』を刊行している。Российская цивилизация в пространстве, времени и мировом контексте.

⁽¹⁶⁾ Митрополит Николай 1953b, 25.

ニコライ府主教による世界平和組織に関する記事は 12 点である（表 3）。その中で、5 点は世界平和擁護者大会（World Congress of Partisans of Peace）⁽¹⁷⁾をテーマとしている。1949 年に開催された同大会の報告では次のように記す。

「4 月 20 日、フランスの首都で世界平和擁護者大会が開幕した。大会は人民大衆の不屈の意志を世界に表現するものであった。この大会には 2000 人以上の代表が参集した。彼らは 72 カ国と 10 の最も大きな国際組織の代表であり、男性と女性 60 億人の名において、世界の国々において平凡な人々が何を思いそして何を欲しているかを発言するために集ったのである。／パリでの会議と同時に、フランス政府からパリ入りを許可されなかった 275 人の代表が、プラハで同時に開催された大会に参集した。／パリ大会は全世界の諸国民が示す、平和勢力結束の壮大な光景であった。大会の活動は巨大なホール「プレイエル」で行われた。幹部会員の席は 72 の国旗で包み込まれていた。これらの国旗は諸国民の協力、彼らの平和と友好に生きたいとの願いを象徴するものであった。／さまざまな国の使者たちが次々と演壇に上がり、彼らの一人ひとりが怒りまたは冷笑とともに新たな戦争の挑発者について語っていった。一人ひとりが平和、友好、協力について語り、人々はさまざまな言語で語っていたにもかかわらず、このホールにはお互いを理解しない人はいないのであった⁽¹⁸⁾。」

ニコライは東側諸国が主導する世界平和擁護者大会の模様を生き生きと肯定的に伝えている。また、世界平和評議会（World Peace Council）⁽¹⁹⁾をテーマとする記事も 4 点掲載されている。51 年 2 月にベルリンで開かれた第一回総会の報告では次のように記す。

「世界平和評議会第一回総会の議題には、全世界を心配させ全ての諸国民がやきもきして解決を期待している諸問題があがっていた。それは朝鮮問題と関連したドイツ問題の平和的解決についてであり、日本問題の平和的解決についてであった。総会は、ワルシャワ大会と世界平和評議会執行部のジュネーブ総会（今年 1 月）で作成された平和施策の保障に関する諸問題も検討することを課題に設定していたし、平和擁護者運動の拡大などについての問題も課題としていた。／世界平和評議会がその第一回総会を開催したのは、イ・ベ・スターリンの次の言葉が世界に響き渡った日であった。／『もし人民が平和維持の任務をその手につかんで最後まで放さないならば、平和は維持され強固になるであろう。もし戦争を挑発する者が人民大衆をうそで意のままにし、彼らを欺きそして

⁽¹⁷⁾ 1949 年 4 月、第一回世界平和擁護者大会がパリとプラハで開催された。これには 72 カ国から 2005 人の進歩的文化人、共産主義者その他が集い、原子兵器禁止、軍拡と軍事ブロック・植民地体制・日独の再軍備などに反対した。平和運動の国際連絡機関として世界平和擁護者大会委員会が設置される。50 年 3 月にストックホルム・アピール（核兵器禁止）を発表し、国際的な署名運動を開始させた。日本平和委員会 1969。

⁽¹⁸⁾ Митрополит Николай 1949, 18–20.

⁽¹⁹⁾ 1950 年 11 月にワルシャワで開催された第二回世界平和擁護者大会において、従来の世界平和擁護者大会委員会が改組され世界平和評議会が設立された。これらの運動では各国共産党の影響力が支配的であり、世界平和評議会におけるソ連の影響力は圧倒的であった。初代議長はフランスの物理学者フレデリック・ジョリオ＝キュリーである。日本からは日本共産党系の日本平和委員会が加入している。日本平和委員会 1969; 吉川 1995.

彼らを新たな世界戦争に引き込むことに成功するならば、戦争は避けられなくなるであろう。／それゆえ戦争を挑発する者の犯罪的な策略を暴露する手段として、平和維持のために広範な運動を展開することは、目下最重要の意味を持っている。』「我らが指導者のこれら賢明で明快な言葉は、総会における世界のさまざまな国の代表たちによる発言の中で言及されていた⁽²⁰⁾。」

ニコライはソ連の影響下にある世界平和評議会の模様を報告しつつ、スターリンを賛美し称えるのである。

6. ニコライ府主教と国際関係

表4 ニコライ府主教と国際関係

年	月	タイトル	テーマ	組織	種類
1949	11	モスクワ総主教庁の指令	国際平和競争デー	ロシア正教会	指令
1951	3	ニコライ府主教。世界平和評議会第一回定例会議におけるスピーチ	平和問題全般	世界平和評議会	スピーチ
1951	7	ニコライ府主教。ヒューレット・ジョンソン博士歓迎のスピーチ	国際スターリン平和賞	国際スターリン賞委員会	スピーチ
1951	9	ニコライ府主教。1951年8月28日のソビエト平和擁護委員会の会議におけるスピーチ	五大国間平和条約	ソビエト平和擁護委員会	スピーチ
1952	1	ニコライ府主教。「キリスト教徒と危機」執行委員会決議とステンリー・エバンスの書簡に対する回答としての電報	朝鮮戦争	「キリスト教徒と危機」執行委員会	電報
1952	3	ニコライ府主教。証人の声	カチンの森事件	ロシア正教会	論説
1952	4	ニコライ府主教。1952年3月13日モスクワ市全市勤労者集会でのスピーチ	朝鮮戦争	モスクワ市全市勤労者集会	スピーチ
1952	5	ニコライ府主教。四谷バプテスト教会牧師、東京都立大学教授阿部行蔵氏への書簡	日本	四谷バプテスト教会	書簡
1952	10	ドイツキリスト教民主同盟議長オット・メシケからニコライ府主教への電報とニコライ府主教の回答電報	ドイツキリスト教民主同盟	ドイツキリスト教民主同盟、ロシア正教会	電報
1953	4	ニコライ府主教。ジェームズ・エンディコット牧師への歓迎のスピーチ	国際スターリン平和賞	カナダ平和擁護国民評議会	スピーチ
1953	4	ニコライ府主教。イブ・ファルジャ逝去に弔辞	フランス平和国民評議会	フランス平和国民評議会	弔辞
1953	9	ニコライ府主教。西ドイツの信徒にラジオでメッセージ	ドイツ	ロシア正教会	メッセージ

ニコライ府主教が国際関係をめぐる様々な問題について論じた記事は 12 点を数える(表4)。この中で、当時進行していた朝鮮戦争⁽²¹⁾をテーマとする記事が2点掲載されている。1952年3月、モスクワ市全市勤労者集会⁽²²⁾のスピーチでは次のように語る。

「キリスト教の教えを本当に信奉する一人ひとりにとって、朝鮮と中国東北部で細菌戦を引き起こした人々が自国での発言でしばしば聖書を引き合いに出し、『キリスト教文明を擁護する』つもりであるかのように言明し、キリスト教徒を名乗っていることは、これ以上ない冒涇であります！／こんな偽善者たちは、キリスト教徒ではありません！彼らには良心もなければ人間性の基礎もなく、自らの凶悪な犯罪の責任に対する自覚もないのです！」「この悪行に終止符を打て、この卑劣で残忍な大量殺人兵器の使用を停

⁽²⁰⁾ Митрополит Николай, 1951, 22–3.

⁽²¹⁾ 1950年6月、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)と大韓民国(韓国)との間に生じた戦争である。この戦争は軍事的優勢と政治的好機を確信した北朝鮮人民軍の38度線各地での総攻撃により開始された。53年7月、アメリカ・中国・北朝鮮間で休戦協定が締結され、韓国はこれを拒否したものの戦争は終結した。西川・川北・小谷ほか編 2001, 601–2.

⁽²²⁾ ソビエト平和擁護委員会の呼び掛けに応え、この集会には社会組織の代表、労働者、事務職員、科学者、文学者、芸術家が集った。それは「モスクワ勤労者の名において朝鮮と中国北東部に細菌兵器を使用するアメリカ帝国主義の極悪非道に対し断固たる抗議を申し立てるため」であった。Резолюция общегородского митинга трудящихся Москвы 1952, 24–5.

止せよ！／朝鮮での戦争を停止せよ！平和と人間性に勝利あれ⁽²³⁾！」

ニコライは平和を願うキリスト教徒として朝鮮半島における戦闘の終結を訴えつつ、朝鮮戦争を南側からの攻撃によるものとしてアメリカを糾弾する。また、国際スターリン平和賞⁽²⁴⁾を取り上げた記事も2点掲載されている。53年3月、カナダ平和擁護国民評議会のジェームズ・エンディコット牧師にこの賞が授与された。その歓迎スピーチの中で次のように語る。

「私の深く信ずるところでは、キリスト教聖職者としてのあなたにとって、数々の賞は遂行される義務の自覚であります。なぜならばあなたは使徒パウロの言葉に従い、平和に奉仕することを探し求めていらっしゃるからです（ローマの信徒への手紙、14章、19節）。これはあなたが中国の宣教師であられたときになさっていたことであり、それはまさにいくつもの世界的な平和擁護者の運動において、諸国民の平和的で相互に好意的な共生と協力を求めつつ、今もお続けになっていることであります。」「あなたは平和運動のまっただ中で働いておられます。あなたは人道的な災難のより正確な原因を十分に理解され、ワシントンの侵略的な目論見を勇敢にも暴露され、ワシントンによって朝鮮と中国で引き起こされた細菌戦に声高に抗議されています。／アメリカ合衆国指導者たちによる軍国主義のプロパガンダは、これがソビエト連邦と人民民主主義諸国に投げつけているうそや誹謗と同じほどにあなたの良心を掻き乱しています⁽²⁵⁾。」

ニコライはカナダの牧師による平和活動を賞賛しつつ、朝鮮戦争におけるアメリカ合衆国を初めとする西側諸国の戦闘行為を糾弾するのである。

お わ り に

本稿では1949年から53年までの『ジャーナル』「平和」欄掲載記事を分析しつつ、戦後初期のロシア正教会が提示した「戦争と平和」像を探ってきた。同欄の特徴として、ソ連内外における平和組織の動向を鋭敏に反映していること、論説を中心に多種多様な記事が掲載されていること、執筆者はニコライ府主教を初めとする正教会高位聖職者が中心となっていることが確認された。また、同欄の性格として、キリスト教会と世界平和組織に関する記事が大半を占めていること、直接の西側批判とソ連賛美を含む記事が半数程度になることが確認された。教会における平和活動の指導者であるニコライはキリスト教会について、ロシア正教会が平和に尽力していること、キリスト教世界が協調すべきことを語っている。また、世界平和組織について、世界平和擁護者大会を初め社会主義陣営が主導するさまざまな平和運動の模様を好意的に伝えたとともに、スターリンを賛美しソ連を称えている。さらに、国際関係について、国際スターリン平和賞の授与といった平和活動に

⁽²³⁾ Митрополит Николай 1952, 23.

⁽²⁴⁾ 国際スターリン賞「諸国民間の平和強化のために」(1949-55)はソ連の名誉賞である。49年12月、ソ連最高会議幹部会令により制定された。毎年5～10名が受賞している。Премии и лауреаты.

⁽²⁵⁾ Митрополит Николай 1953a, 25-26.

尽力しつつ、朝鮮戦争におけるアメリカ合衆国を初めとする資本主義陣営の戦闘行為を糾弾するのである。

このように、「平和」欄はキリスト者として平和を願う声に満ちあふれている。しかしながら、全体としてキリスト教会の分野では正教会賛美、世界平和組織の分野では東側諸国賛美、そして国際関係の分野では西側諸国批判の論調となっている。戦後初期の教会における公式の「戦争と平和」像とは、平和に奉仕する正教会像であり、平和愛好的な東側諸国像であり、好戦的な西側諸国像であった。『ジャーナル』は平和擁護のために活発な言論活動を推進したが、それは当時の冷戦下におけるソビエト国家の意向が色濃く反映されたものであった。次なる課題として、本稿が分析対象とする「平和」欄に掲載された神学的論文や、同欄のその後の動向を検討することも求められよう。広くは、ロシア正教会の平和活動に関する研究の進展が期待されるところである。

参 考 文 献

- Архив Журнала Московской Патриархии с 1943 по 1954 год, <http://archive.e-vestnik.ru/> (accessed 2018-11-23)
- Журнала Московской Патриархии, <http://www.jmp.ru/> (accessed 2018-10-20)
- Забавникова, Е. С. (2014), «К миру призвал нас Господь» (1 Кор. 7, 15): к вопросу о публикациях архиепископа Луки (профессора В. Ф. Войно-Ясенецкого) «в защиту мира» в «Журнале Московской Патриархии» конца 1940-х - начала 1950-х гг.», *Современная филология: материалы III Международной научной конференции* (г. Уфа, июнь 2014 г.), <http://moluch.ru/conf/phil/archive/108/5813/> (accessed 2018-11-23)
- Король, В.Л. (2013), «Миротворческая деятельность Русской Православной Церкви (1949–1991): Историография проблемы», *Вестник полоцкого государственного университета, Серия А: Гуманитарные науки*, No. 9, <http://elib.psu.by:8080/handle/123456789/1182> (accessed 2018-11-23)
- Король, В. Л. (2015), «Деятельность Русской Православной Церкви в защиту мира в 1945 – 1949 гг.», *Вестник Полоцкого государственного университета, Серия А: Гуманитарные науки*, No. 9, <http://elib.psu.by:8080/handle/123456789/13730> (accessed 2018-11-23)
- Митрополит Николай (1949), «На Всемирном Конгрессе сторонников мира», *Журнал Московской Патриархии*, No. 5.
- Митрополит Николай (1950), «В защиту мира. Речь на Конференции духовенства всех христианских исповеданий Чехословакии по вопросам защиты мира», *Журнал Московской Патриархии*, No. 7.
- Митрополит Николай (1951), «На первой сессии Всемирного Совета Мира», *Журнал Московской Патриархии*, No. 3.
- Митрополит Николай (1952), «Речь на общегородском митинге трудящихся г. Москвы 13 марта 1952 года», *Журнал Московской Патриархии*, No. 4.
- Митрополит Николай (1953a), «Приветственная речь пастору Джеймсу Эндикотту», *Журнал Московской Патриархии*, No. 4.
- Митрополит Николай (1953b), «Речь на заседании расширенного пленума Советского Комитета защиты мира», *Журнал Московской Патриархии*, No. 9.
- Одинцов, М. И. (2014), *Русская православная церковь накануне и в эпоху сталинского социализма. 1917–1953 гг.*, Москва, Политическая энциклопедия.
- Онищенко, А. Б. (2011), «О роли и значении Совета по делам Русской Православной Церкви в 1943–1953 годах», *Церковь и время*, No. 2 (55), <https://mospat.ru/church-and-time/nr55>. (accessed 2019-02-08)
- Официальный сайт Русской Православной Церкви(a), <http://www.patriarchia.ru/db/text/1585349.html> (accessed 2019-02-04)
- Официальный сайт Русской Православной Церкви(b), <http://www.patriarchia.ru/db/text/5306940.html> (accessed 2019-02-03)
- Премии и лауреаты, <http://idea-news.ru/premii-mira/mezhdunarodnye-premii-mira-i-ih-laureaty/mezhdunarodnaya-stalinskaya-premiya-za-ukreplenie-mira-mezhdu-narodami.htmlz> (accessed 2019-02-

06)

“Резолюция общегородского митинга трудящихся Москвы” (1952), *Журнал Московской Патриархии*, No. 4.

Российская цивилизация в пространстве, времени и мировом контексте, рос-мир.рф/node/2759 (accessed 2019-02-05)

Чумаченко, Т. А. (2007), “Московская патриархия в движении сторонников мира: 1949 –1953 гг.”, *Известия Челябинского научного центра*, Вып. 1 (35), <https://readera.ru/moskovskaja-patriarhija-v-dvizhenii-storonnikov-mira-1949-1953-gg-14298220> (accessed 2018-11-23)

Шкаровский, М. В.(1995), “Русская православная церковь в 1943–1957 годах”, *Вопросы истории*, No. 8.

Шкаровский, М. В.(1999), *Русская Православная Церковь при Сталине и Хрущёве (Государственно - церковные отношения в СССР в 1939 – 1964 годах)*, М.: Крутицкое Патриаршее Подворье Общество любителей церковной истории, https://azbyka.ru/otechnik/Istoriya_Tserkvi/russkaja-pravoslavnaja-tserkov-pri-staline-i-hrushcheve-gosudarstvenno-tserkovnye-otnoshenija-v-sssr-v-1939-1964-godah/ (accessed 2018-11-23)

Шкаровский, Михаил (2009), “Сталинская религиозная политика и Русская Православная Церковь в 1943–1953 годах”, *Acta Slavica Iaponica*, No. 27, https://azbyka.ru/otechnik/Istoriya_Tserkvi/stalinskaja-religioznaja-politika-i-russkaja-pravoslavnaja-tserkov-v-1943-1953-godah/ (accessed 2018-11-23)

Chumachenko, Tatiana A.(Edited and Translated by Edward E. Roslof)(2002), *Church and State in Soviet Russia : Russian Orthodoxy from World War II to the Khrushchev Years*, New York: M.E. Sharpe.

Fletcher, William C. (1973), *Religion and Soviet foreign policy, 1945–1970*, London: Oxford University Press for the Royal Institute of International Affairs.

World Council of Churches, <https://www.oikoumene.org/en/member-churches/orthodox-church-in-the-czech-lands-and-slovakia> (accessed 2019-02-05)

有馬明恵 (2007), 『内容分析の方法』ナカニシヤ出版。

井上順孝編 (2005), 『現代宗教事典』弘文堂。

大谷信介・木下栄二・小松洋ほか編 (2013), 『新・社会調査へのアプローチ——理論と方法——』ミネルヴァ書房。

北澤毅・古賀正義編 (2008), 『質的調査法を学ぶ人のために』世界思想社。

ゴルジェンコ, N・S (宮本延治訳) (1990)『現代ロシア正教』恒文社。

鈴木裕久・島崎哲彦 (2006), 『新版・マス・コミュニケーションの調査研究法』創風社。

世界宗教百科事典編集委員会編 (2012), 『世界宗教百科事典』丸善書店。

ゼルノフ, N (宮本憲訳) (1991), 『ロシア正教会の歴史』日本基督教団出版局。

西川正雄・川北稔・小谷汪之ほか編 (2001), 『角川世界史辞典』角川書店。

日本平和委員会編 (1969), 『平和運動 20 年運動史』大月書店。

廣岡正久 (1987), 「ソヴェト体制下の宗教と政治——千年祭を迎えるロシア正教会を中心として」『ソ連研究』No.4。

廣岡正久 (1988), 『ソヴィエト政治と宗教：呪縛された社会主義』未来社。

廣岡正久 (1993), 『ロシア正教の千年：聖と俗のはざままで』日本放送出版協会。

廣岡正久 (2007), 「スターリン体制下の教会と国家——府主教セルギーの『融和』政策をめぐる——」『産大法学』第 40 巻第 3・4 号。

吉川勇一編 (1995), 『コメンタール戦後 50 年④ 反戦平和の思想と運動』社会評論社。

(付記) 本稿はロシア・東欧学会 2018 年研究大会分科会 2 (文化・哲学) における報告ペーパー「戦後ロシア正教会における「戦争と平和」像——1949 年～1953 年——」に加筆し修正したものです。貴重なコメントと質問を寄せて下さった座長の阪本秀昭先生 (天理大学), 討論者の有宗昌子先生 (大阪大学), 松里公孝先生 (東京大学), 中村唯史先生 (京都大学), 伊藤順二先生 (京都大学) ほかの先生方に感謝いたします。

(本論文は、複数のレフェリーによる審査を経て編集委員会が採択した。)